

「鬼を恐れない」運動

名 和 又 介

1．はじめに

1961年2月5日の人民日報に『鬼を恐れない物語』序が掲載された。第5頁の三分の二を何其芳¹の文章・序言が占めた。残りに『鬼を恐れない物語』²の「宋定伯鬼を捉える」「妖術」「鬼は姜三莽を避ける」の3編が原文・註釈・現代語訳つきで紹介されている。

同日付の中国青年報にも見出しに『鬼を恐れない物語』序が掲載され、丁寧に編者按まで付け加えられている。文字も人民日報より大きく、序言だけで第1頁を使用し、第2頁・第3頁は同じく『鬼を恐れない物語』の10編を原文・註釈・現代語訳つきで紹介している。

関連記事は、2月一杯さらに3月の中旬まで続き、5本ほどの記事が目についた。こうした動向は『鬼を恐れない物語』を中心にこの時期にキャンペーンされた政治運動の一環であると考えられる。

「鬼を恐れない」運動は、大きな反響はなかったように思われる。この時期に登場し、やがて魑魅魍魎の活躍する暗黒の中に消えていったようである。しかし文化大革命の狼煙は、毛沢東派(文革派)以外を牛鬼蛇神と決めつけ、徹底的に共産党幹部・文化人などを迫害した経緯をもつ。³ 政敵を牛鬼蛇神と呼んで迫害した理由は、興味のある問題であり、このキャンペーンと関わる点もありそうである。以下、何其芳の序言を見ていくことから始めよう。

2．『鬼を恐れない物語』序言

先ず序言を書いた何其芳を紹介しよう。1912年生まれの人・評論家である。当時の肩書きは、中国作家協会書記処書記、文学研究所長である。毛沢

『言語文化』9-4：671 - 696ページ 2007.
同志社大学言語文化学会 ©名和又介

東の提起した知識人の意識変革に共鳴し、自らの変革を描いた作品が印象的である。毛沢東文芸理論を推し進めたブレインでもあった。陳伯達・康生などの毛沢東側近と同様、この時期に個人崇拜を進めることに一役かった訳である。

編者按は以下のように書いている。「この文章は目前の闘争に結合し、戦略上は敵を軽視し、戦術上は敵を重視する、という毛主席の素晴らしい思想を生き生きと述べている。⁴ 読んでみると、迷信を打破し、思想を解放し、今日の世界に存在する帝国主義、反動派、修正主義、天災さらに我々が前進する中でその他の困難や挫折などをまねく邪悪な化け物を少しも恐れないという覚悟を高めてくれる。」ここに書かれている帝国主義は主にアメリカを指し、修正主義はチトーのユーゴスラビアを指していた。やがて中ソ論争が始まり、ソ連も主要敵国になっていく。天災は、1960年前後の自然災害を意味している。大躍進の失敗は自然災害が原因であるという論調が見られたが、現在は人災と理解されているようである。

「迷信を打破し、思想を解放し」という文言は、さらりと読み過ぎてしまいそうである。しかし、以前の論文で指摘したように、「破除迷信」は反右派闘争以来毛沢東が提起したスローガンであった。⁵ その意味するものは「教授や科学者などの専門家の意見は軽視する」ことであった。陳伯達の提起したスローガン「辺干辺学」も表面的な意味は、働きながら学習することだが、実際に意味するものは「実践の中で学習し、専門家の意見に惑わされない」であった。一方で、教授や科学者など知識人の権威の失墜をはかり、他方では強力に毛沢東崇拜を教育現場に持ち込んだのである。

反右派闘争で55万人に上る右派（知識人が大半であった）の市民権を剥奪して、発言権を奪い、労働改造所や刑務所に送り、さらに知識人を貶めるようなスローガンを高唱したのである。高等教育やマスコミなどのポストに共産党幹部を配置し、毛沢東の一言で中国全体が動く、中国版国民総動員の体制が完成する。大躍進が可能になり、人民公社化の見直しがすすまなかった

理由は、このような体制にも求められるであろう。

『鬼を恐れない物語』は、迷信打破を目的にして編まれたようにみえる。反抗的な知識人の口を封じた後、この運動は何を目的に展開されたのだろうか。アメリカ帝国主義と修正主義はこの当時の決まり文句である。どうも後半の天災さらに自分たちの革命的行動を阻止しようとする邪悪な化け物に焦点があてられているように思われる。ここではあくまで予想として先に何其芳の序言を見てみよう。

「我が国の昔の小説作者は、大部分鬼を話題にした。このことからこれらの作者が鬼にかかわる迷信から自由ではありえないことが分かる。しかし鬼は存在するが、みんなが怖がる鬼に敬意を表しないで、鬼は恐くないし、鬼をそしり、鬼を排除し、鬼に打撃を与え、鬼を捉える人物を描いた作者もいたのである。これらの物語はとても意義深い。物語は、我が国古代人民の恐いものなし精神を反映している。これこそ我々がこの種の『鬼を恐れない物語』を編んだ理由である。」以下何其芳の序言を、引用しながら見ていくことにしたい。

ここで重要なことは、鬼の読み方である。日本語はオニと読むが、ここで話題にしているのはオニではない。中国語の鬼はguǐと発音し、日本語のオニより意味範囲が広いので、音読みでキと読んでいただきたい。その違いに関しては後ほど触れるつもりである。日中の違いは興味深い問題を含んでいるが、ここでは読み方の違いのみを指摘しておく。

小説の題材に鬼を選択することが迷信になる訳ではなからう。しかし何其芳の口吻は鬼を選択すること自体を非難している。歴代の名著で幽霊（鬼の一種）が登場する作品は数え切れない。シェークスピアの作品、世阿弥の作品など枚挙に暇がないほどである。⁶ 中国文学の世界では、中間人物論が展開されようとした時期でもある。英雄人物を描くのが文学作品の目的で、動揺する中間人物が主人公になることは革命的でない、という主張が大真面目

に紙上をにぎわした。文学研究所の責任者であった何其芳も毛沢東に追隨しながらの発言であり、慎重さが求められる状況でもあった。

「我々がこの小冊子を編集し始めたのは、人民日報に毛沢東同志の『帝国主義とすべての反動派は張り子の虎である。』が発表された後である。⁷ 毛沢東同志は言った。『すべての反動派は張り子の虎である。見た目には、反動派の様子は恐そうだ、しかし実際はたいした力はない。長い目で問題を見れば、本当の強い力は反動派にあるのではなく、人民にあるのだ。』（中略）多くの事実が毛沢東同志の論断を証明している。」

「すべての反動派は張り子の虎である」は「戦略上は敵を軽視し、戦術上は敵を重視する」方針の前半部分である。初めに政治キャンペーンがあり、その運動を推進する過程で「鬼を恐れない」運動が展開されたことが分かる。政治キャンペーンに文学界が動員された訳である。張り子の虎である帝国主義や反動派と祖先崇拜に連なる鬼を同一視できるのか、いささか苦慮するところかも知れない。次の引用箇所などが同一視に当たり、反動派の部分を鬼に当てはめている感じがある。

「実際の状況に照らせば、鬼が我々を恐れるのか、反対に我々が鬼を恐るのか。我々が鬼を恐れれば恐れるほど、鬼は我々を好きになり、慈悲の心になり、我々を損なわず、その結果我々の事業が突然順調になり、すべては光が溢れ美しくなり、春が来て花が咲くというのか。」

「毛沢東同志は1958年12月中共中央政治局武昌会議の席上我々に明確な説明をした。⁸ 世界のすべての事物は対立物の統一でないものではなく、二面性を持たないものはない。帝国主義とすべての反動派も二面性を持ち、本当の虎でもあり、張り子の虎でもある。本質から、長期的に見れば、反動派は張り子の虎である、だから我々は戦略上反動派を軽視する。反動派が百万千万の人を殺し今後も人殺しをする観点から言えば、本当の虎でもある、だから我々は策略から、戦術上反動派を重視する。」

同じ言葉、同じ観点の繰り返しである。毛沢東の個人崇拜は、反右派闘争以降顕著になった。「毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の最高峰であり、世界中で毛沢東の水準まで達したものは誰もいない。」と康生は持ち上げた。その点では、何其芳も大同小異である。

具体的に作品を紹介する部分の引用には次のような文言までである。「毛沢東同志の高度な理論上の概括がなければ、思想の導きがなければ、我々はこれらの物語を読んでも立派な意義や教訓を見出すことは容易でない。」ことさら何其芳を非難するために引用しているつもりはない。文芸理論家の讃辞の言葉が、どれほど自己を損ない、文学を損なっているか、残された言葉は恐ろしい。引用は最後にしよう。

「しかし読者は理解しなければならない。世界中妖魔鬼神はまだ沢山いる、これらを消滅させるには一定の時間が必要だ、国内の困難もまだ大きい、中国型の魔物・遺物もまだ祟りをなしている、社会主義の偉大な建設途上には克服すべき障害も多い、本書が出版されるのが待たれた。」

世界中の妖魔鬼神はさておくとして、中国型の魔物・遺物とは誰を指しているのか。唯物論者にとって、宗教はアヘンであり、鬼の存在そのものが迷信であることはよく分かる。しかし鬼の存在はこれまたさておくことにして、存在しない迷信の言葉（鬼、鬼神、魔物）を利用して政敵を攻撃するのは、これまた不思議な現象である。自分のみが純粋な革命家であり、資本主義のチリ・ホコリを浴びた共産党員は魔物だと決め付けている独善性を感じてならない。また独善性がなければ、このような文言も書けないであろう。序言の紹介はこのぐらいにして、具体的な作品を見てみよう。

3. 『鬼を恐れない物語』の作品紹介

これから『鬼を恐れない物語』が取り上げた作品を具体的に紹介していこう。ただし、引用は中国青年報に掲載された作品を中心にする。時代は魏晉南北朝時代から清朝まで幅広い。ほとんどの作品は、日本語の中国文学書に

も紹介されている有名な物語である。

「宋定伯鬼を捉える」

現代語訳

南陽に宋定伯という人がいた。若いとき、夜道を歩いていて、鬼に出くわした。宋は鬼に訊ねた。「お前は誰だ。」鬼は答えた。「俺は鬼だ。」続いて鬼が反問して、「お前は一体誰だ。」「俺も鬼だ。」鬼がまた訊ねた。「お前は何処に行くのだ。」定伯は答えた。「宛市に行く。」鬼は言った。「俺も宛市に行く。」そこで、二人は一緒に行くことにした。数里歩いてから、鬼が言った。「早く歩きすぎて疲れてしまった。お互いに交替でおんぶして行こうじゃないか。」定伯は同意して言った。「いいね。」そこで鬼が先ず定伯を背負って数里歩いた。鬼が言った。「お前は重すぎるぞ、鬼ではあるまい。」定伯は言った。「俺は死んですぐの新鬼だ、だから少し重いのだ。」そう言って定伯が鬼を背負う番になったが、鬼は確かに少しも重さを感じなかった。二人はこうしてお互いに何度か背負った。定伯が鬼に訊ねた。「俺は新鬼だが、鬼が怖いものは何だろう。」鬼が言った。「怖いものは、人が鬼に唾を吐くことだ。」

こうして二人は川辺に来た、定伯は鬼に先に川を渡らせた。少しの物音もしなかった。定伯が自分で川を渡ると、ジャブジャブと音がした。鬼がまた訊ねた。「何故水音がする。」定伯が答えた。「死んだばかりだから、まだ渡河に慣れていないのだ、疑わないでくれ。」

二人がもうすぐ宛市に着くころ、定伯は鬼を肩に乗せて、ギョッときつくつかんだ。鬼は背中でキュウキュウと叫び、降ろすよう求めたが、定伯は全く取り合わなかった。定伯は鬼を背負って、まっすぐ宛市に来た、鬼は地面に降りると、羊に化けていた。定伯は羊を売り払い、鬼に返らないよう、唾を吐きかけた。定伯は1500銭を手にして、帰った。当時石崇という人が次のように言った。「定伯は鬼を売って、1500銭を手に入れた。」(訳終わり)

『搜神記』⁹ が原典である。魯迅の『中国小説史略』にも詳細な紹介がある。これらの物語は、当時事実として記憶されていたが、歴史が進むにつれて、物語の範疇に分類されるようになっていった。宋定伯の機知と鬼の愚か

さが際立つ物語で、「鬼を恐れない」のキャンペーンに相応しい話柄である。キャンペーンは、鬼を笑い飛ばし、鬼を馬鹿にするお話の連続である。鬼は妖怪・幽霊の代名詞でしかないが、中国人の死生観に関わる重要な問題も秘めている。以下多少鬼の性質を考えてみたい。

ここで、鬼に関わる部分を見ていこう。まず、人間が死んだら鬼になると言う点である。ここに登場する鬼は、生前は名前を持っていた個人であっただろう。張三李四であった個人が、死ぬと鬼に変ることになる。定伯が鬼を騙したのも自分が新鬼であると偽ったからである。鬼は定伯を新鬼と思えばこそ騙されたのである。人間が死ぬことを鬼籍（鬼録）にはいるというのは、まさにこの関係を意味しているのである。

人間の定伯と鬼の違いは興味深い。夜道を歩くのは、人間ではなく鬼である。最初に二人が会って、「俺は鬼だ。」と鬼が答えるのは、当然なのだ。日が暮れて夜が明けるまでの時間は魑魅魍魎の世界だからである。定伯が「俺も鬼だ。」と答えるのも仕方がないかも知れない。定伯の機知ではあるが、本来魑魅魍魎の活躍する時間帯に人間がいるのはおかしいのだから、「俺は人間だ。」もしくは「俺は定伯だ。」とは答えにくいであろう。同じ鬼であればこそ、同行しお互いにおんぶする関係になったのである。

違いは幾つかある。人間には重さ（体重）があるが、鬼には重さがなさそうなことである。或いはあっても人間には感じられないことである。ここから連想されることは、魂魄の問題である。人間は、魂魄から成り立っているという考えである。魂は、精神的なものであり、まさに魂（たましい）である。魄は、肉体的なものであり、魂魄が別れると死ぬことになる。心霊二元論といえば分かりやすいかも知れない。「牡丹亭還魂記」¹⁰などは魂魄を主題にした物語といえよう。ここでは重さだけを問題にするよう限定しよう。

魂魄の両者併せ持つ人間は当然重さ（体重）がある。しかし、仮定ではあるが魂だけの鬼には重さがないと思われる。魄（肉体）をなくした鬼の変幻

自在さは想像以上のものかもしれない。違いの一つに川を渡るときに、水音がしないことがある。これも肉体のない鬼であれば当然のことであろう。物体が動くから抵抗があるが、物体でなく魂であれば抵抗もないのかも知れない。

鬼は魂かも知れないと書いてきたが、鬼は死んだ人間の魂つまり死霊である。鬼字の項目を諸橋大漢和辞典で引くと、九分類ほどでてくる。最初の項目一のイが、「死人の魂」と説明している。口が、「ひとがみ、人鬼。祭られた死人の幽魂。」八が、「ひとがみの中、特に定められた神位¹¹を安置する場所のないもの」と説明している。私たち日本人が想像する鬼（オニ）は九番目の項目のイに初めて登場する。「想像上の生物。人形で双角あり、面貌獰悪、裸体で虎皮を褌とする。」

日中で鬼の字の意味は相当異なるようである。鬼は、基本義は死者の魂つまり死霊である。その死霊を祭れば、口のひとがみ、人鬼になる。死者は敬して遠ざけるのが礼儀であろうから、ひとがみとして祭るのは当然のことであろう。ところがお祭りするひとがみが増えてくると整理せざるをえない。八に移行する次第になる。八は「ひとがみの中、特に定められた神位を安置する場所のないもの」の後に以下の文言が続く。「新死者が出来るごとに先祖の神位を、其の安置してあった処から一代だけ上の安置する場所にくり上げて、安置する場所のなくなったものを鬼とする。」

神位が少なければ問題がないのだろうが、死者の数が増えてくると神位も当然増えてくる。一代だけくり上げるのはいいのだが、何処までくり上げることになるのだろう。文言はさらに続く。「鬼にくり入れる世代は身分によって異なる。天子は九代、諸侯は七代、大夫は五代、上士は三代、（途中略）諸人は父から直ちに鬼と呼ぶ。」死んだら皇帝から庶民までみんな仲良く鬼になるのかと思っていたら、違うのである。人間は鬼になるのは嫌なのであり、鬼になるのは先送りしたいのである。

皇帝は、九代遡らないと鬼にならない。またご先祖を祭る廟も厳しく規定されている。¹² 皇帝になれば、九代のご先祖はお祭りしなければならない訳である。このようなルールが確立された理由が分からない。識者のご教示をいただければありがたい。ただ身分秩序の明確化は社会の安定のため貢献したことであろう。韓国の兩班階級が五代遡ってご先祖のお祭りをするのも、このルールに基づいているのである。

ひとがみを祭るとき、偉人・賢人も庶民と同じかと思えば、これまた違うのである。諸橋大漢和の鬼字一の二は、「冥々の中にあって不可思議の力ありと信ぜられる人格。一に聖人の精気を神、賢人の精気を鬼という。」と説明している。同じひとがみでも、聖人・賢人の精気は故人になってもエネルギーに満ちているかのようなのである。聖人の精気を神とする典型は、孔子廟（夫子廟）の存在であろう。

「陳鵬年氣を吹いて縊鬼を退ける」

現代語訳

陳鵬年が出世する前、同郷の李孚と仲良しだった。秋の夜、陳は月光の中、李孚の家に行って世間話をしようとした。李孚はもともと貧しい読書人で、陳に言った。「家内に酒を用意させようとしたがなかったので、ちょっと待ってくれ。外に行って酒を買って来るから。飲みながら月を愛でよう。」陳は李孚の詩を手にとり、見ながら待っていた。突然ザンバラ髪で紺の服を着た女が門を押し入ってきた。女は陳を見ると、後ずさりした。

女は李孚の親戚で、お客に遠慮して入ってこないのだと思った。そこで体の向きを変えて正面から向き合うのを避けた。その女は袖にあるものを持ち、敷居の下につめて、それから中に入ってしまった。陳はなんだろうと思って敷居の下を見ると、何と縄で生臭く血痕がついていた。それで女が吊死鬼（首吊り鬼）だと気がついた。陳は縄を自分の靴に放り込んで、元のように座っていた。

やがてザンバラ髪の女が出てきて、敷居の下を探したが、縄がないので、怒りだし、まっすぐ陳に近づき叫んだ。「道具を返せ！」陳は尋ねた。「何の

道具。」女は答えず、体を直立させ、口を開いて陳に気を吹いた。冷気が氷のようだった。髪の毛が逆立ち、歯がガチガチと鳴り、灯りが豆のように小さくなり、暗闇に消えそうであった。陳はひらめいて言った。「鬼に気があるのだから、俺にない訳がない。」そこで気を鼓して鬼に吹きつけた。鬼の体で気を吹かれた部分は、たちまち空洞になった。先ず腹を吹き、それから胸を吹き、最後に頭まで吹き消した。やがて鬼は煙のように消えてしまい、見えなくなった。李孚が酒を買って帰って来、家内が寢床で首をくくっている、と叫んだ。陳は笑いながら言った。「心配無用。吊死鬼の縄はまだ俺の靴の中さ。」陳は先ほどの様子を李に知らせ、二人は一緒に妻を救い、妻に生姜湯を飲ませると、蘇生した。李孚は何故死のうとしたか、妻に尋ねた。

妻は言った。「家は貧しく、夫はこんなにお客好き、私の頭の簪きりなのに、それもお酒に変わってしまった。胸が塞がって、お客が外の間にいるので泣きもできません。ちょうどその時、私のそばに突然ザンバラ髪の女がいて、『近所の者だが、あなたの夫はお客のためにお酒を買いに行ったのではなく、賭博をしにいったのさ。』私はますます胸が苦しくなり、夜は更けて、夫は帰らず、お客もいるまま、お客に帰ってもらう面目もありません。そのザンバラ髪の女は手に輪を作り、『ここから入っていけば仏の国に行け、永遠の楽しみが得られるよ！』私は、頭を入れてたけど、手の輪はきつくなるともゆったりでした。「私の仏帯を持ってきてあげよう、あなたは成仏できますよ。」女は帯を取りに行行って長らく帰ってきませんでした。私が昏々と夢を見ているとき、お二人が助けてくれました。」後に近所の人たちに聞いたところ、数ヶ月前やはり村の主婦がくびれていた。(訳終わり)

陳鵬年の気が吊死鬼を雲散霧消させるという「鬼を恐れない」の典型的な物語である。この原典は、袁枚の『子不語』¹³ である。袁枚は清代の詩人で、詩論・文学論に優れ、『子不語』という怪奇小説も書き、『随園食単』というグルメの本も出した文化関係のスーパーマンだった。この物語に登場する吊死鬼は、先述した諸橋大漢和の一のホに相当する。ホは、「人を賊害する陰気、又は現体。もののけ。ばけもの。」と説明している。

ザンバラ髪¹⁴は重要な決め手になる。男女を問わず、ザンバラ髪は普通の状態ではないのである。囚人が処刑される姿であり、死刑で殺された怨霊の姿でもあるから。絵画の中で、ザンバラ髪の姿が描写されていたらまず鬼であると考えて間違いないだろう。死を覚悟した屈原の姿は、ザンバラ髪に描かれている。日本の幽霊の姿がザンバラ髪であることは、鬼であることの証明かも知れない。

また陳が親戚の女と勘違いして向きを変える動作も意味がある。鬼は直進しかできず、曲線運動ができない存在なのだ。『初恋の来た道』¹⁵で過労死したお父さんを担いで、県城から村に連れ帰る場面がある。鬼（死んだお父さん）が迷わないように行列はできるだけ直進し、曲がり道など方向転換する処で声をあげるのである。典型的な四合院の建物の入り口に照壁があるのは、鬼が入れないようにする工夫だったのである。照壁¹⁶に鬼避けの図案やレリーフを描いて退散願い、入り口の安全を守る目的があったのである。話を元に戻すと、陳が鬼の正面から外れたので、安心して直進し、家の中に入ってしまった訳である。

物語の最後に、最近くびれた村の主婦が出てくる。この主婦が吊死鬼の正体だった。死霊とりわけ横死した死霊は怨霊に変わる。これが諸橋大漢和辞典の鬼字の一の水である。不慮の死、非業の死を遂げた霊は、魂の行き場がなくて、同じ不幸を人間にもたらし、それが適うと往生すると信じられていた。首を吊って死んだら吊死鬼、溺れ死んだら淹死鬼になり、身代わりを探すのである。日本でもよく聞くお話である。誰かが池でおぼれ死んだとき、これは以前の死者が身代わりとして池に引きずり込んで溺れ死にさせたのだと。

京都に顕著な御霊信仰などはこの範疇に入ると思われる。祇園御霊会は、スサノオや牛頭天王の霊力を借りて疫病を退散させる訳である。スサノオは高天原を追放された不遇の象徴であり、八岐大蛇を退治した偉大な霊力の所有者であった。北野天神は、菅原道真の怨霊を鎮めるため作られた神社であ

る。道真の怨霊を鎮めるとともに、その靈力にあやかって学問の進歩を祈るという形であろう。

源氏物語は、死霊や生霊に満ち満ちている。とりわけ六条の御息所の生霊が、葵の上を呪い殺すのは凄まじい場面である。安倍晴明など陰陽師の活躍も期待されたのかも知れない。桓武天皇の熱い信頼を得た空海なども密教を武器として、鬼を調伏したことであろう。唐・宋の時代は鬼に満ち満ちていたのと同じように、平安時代初期は鬼が満ち溢れていた時代なのかも知れない。

「妖術」

現代語訳

于公は若いとき、武術を好み、拳法を学び、力持ちで両手に鼎を持って舞うことができた。明末の崇禎のとき、于公は都で殿試¹⁷を受けていたが、下男が病気で寝たきりで、とても心配した。そのとき、都には人の生死を占う有名な占い師がいたので、于公は占ってもらいに行った。前に出てまだ口を開かないうちに、占い師は言った。「下男のを聞きに来たのであろう。」于公は驚いてその通りだと答えた。占い師は言った。「下男の病は問題ない。が、あなたは危ない！」于公は自分の運命を占ってもらった。占いが終わると、占い師は重々しく言った。「三日のうちに死ぬだろう。」于公はしばらく意外に思い、呆然としていた。占い師は席を正して言った。「私はいささか妖術を心得ております。お礼をいただければ、あなたの災いを取り去ってあげましょう。」于公は自分の生死が定まった以上妖術など役に立つまいと思い、返答もせず行こうとした。占い師がまた言った。「お礼程度のお金を惜しんだら、この先後悔するぞ。」周りの人は、于公を心配して、お金を出して占い師にすぎるよう勧めたが、于公は耳を貸さなかった。

瞬くうちに三日目になった、于公はいずまいを正して旅館の部屋に座っていた。静かに暗闇を見ていたが、一日何もなかった。夜になり、入り口にかんぬきをして、部屋を明るくして、傍に刀をおいて待っていた。2時間過ぎたが、死の徴候は全くなかった。床をとり寝ようとしたとき、窓の隙間から

カサコソという物音がした。慌てて目を見開いてよく見ると、槍を持った小人が窓から入ってきて、部屋に降り立つと人並みの大きさになった。于公はすばやく刀を持って切ったが、手ごたえはなかった。その化け物はまた小さくなって、窓の隙間から逃げようとした。于公は目にも留まらぬ早業で切りつけると、化け物の手ごたえがあって倒れた。明かりを持ってきて見ると、なんと紙の人形（ヒトガタ）であり、腰から半分になっていた。于公は寝ることなく、また座って待っていた。しばらくすると、何者かが窓から入り、獰猛凶悪で鬼のような者が、部屋に降り立った。于公がすばやく一撃すると、両断されてまだうごめいていた。また立ち上がらないよう、続けざまに数撃するとみな手ごたえがあり、切れ味はよかった。よく見ると土の人形（ヒトガタ）で、粉々になり形を成していなかった。

于公は窓の傍に移動して座り、窓の隙間を凝視していた。しばらくすると、窓の外で牛の吠えるような声がした¹⁸。誰かが窓を押して壁が揺れ、今にも倒壊しそうだった。于公は部屋の中で押しつぶされてはかなわない、部屋の外で戦うべしと考えた。そこで戸を開いて外に躍り出た。屋根の庇ぐらいの大きな鬼がいた。おぼろげな月の光に、顔は真っ黒で、両眼は黄色い光を発し、上半身裸で、足もむき出し、手には弓を持ち、腰には簞をつけていた。于公が驚いているうちに、鬼は矢を放った、于公は刀で矢を防ぎ、矢は地面に落ちた。于公が鬼に一撃くれようとする、鬼はまた矢を放った。于公がすばやく身を翻すと、矢は壁に刺さり、ドカッという音がした。鬼は怒り狂い、刀を抜いて、風のように振り回して、于公めがけて切りかかった。于公はサルのようにすばしこく前にジャンプしたので、刀は中庭の岩にあたり、岩は真二つになった。于公は鬼の股に飛び込み、鬼のくるぶしを切ったら、鈍い音がした。鬼は益々怒り狂い、声は雷のようで、身を翻すと于公をたたき切ろうとした。が、于公の着物をかすただけだった。そこで于公は鬼のわきの下に飛び込み、力一杯振り下ろすと、鈍い音がして、鬼は地面に倒れた。于公はまたしばらく切りまくり、まるで魚版¹⁹をたたくような音がした。明かりを取って見ると、木偶であり、人の大きさで、弓矢を腰に手挟んで、顔つきは獰猛だった。切られたところから血が出ていた。于公は火をともし、明け方まで待っていた。そうしてやっと分かった。これらはすべて占い師

の妖術で、人を殺めて、占い師の靈驗あらたかさを誇示しようとするものだと。

翌日、于公は事実を友人に知らせ、ともに占い師のところに押しかけた。占い師は遠くから于公たちが来るのを見ていて、妖術を使い、姿を隠した。ある人が言った。「これは透明術だ。犬の血で破れる。」于公は、言われたとおり、犬の血を用意して、また行った。占い師は姿を隠したが、犬の血をかけられると、姿を現し、頭は犬の血だらけ、目だけ光っていて、鬼のように立ちすくんでいた。そこでみんなで捕まえた。占い師はお役所に送られ処刑された。(訳終わり)

「妖術」の原典は、聊齋志異²⁰である。作者は蒲松齡で山東省の中ほど淄川の出身。舞台は今の北京になる。崇禎年間、明末の崇禎帝の名前から取られている。農民暴動が多発し、時代が変わろうとしていたときの物語である。この作品の中に鬼という言葉が繰り返されるが、鬼と妖術はあまり関係がないと思われる。鬼はあくまで死霊であり、それも人間の死霊にかかわる概念だからである。勿論無関係であれば、翻訳する必要もないのだが、『鬼を恐れない物語』に掲載され、しかも人民日報に転載されている以上無視できない。以下のように解釈し、コメントしたい。

川鍋暁斎の百鬼画壇図を見ると、人間・動物・道具などが群れを成して横行する姿が描かれている。このようなスタイルの絵画も当時は一般的であったと解説されている。となると、鬼は人間だけに限定する必要もなさそうである。もし動物に魂があるのなら、人間と同じように鬼になっても不思議ではない。牛鬼蛇神という言葉は、まさしく牛や蛇の魂が変化した妖怪であろう。さらに人間が使用した道具類も魂を持っているようである。人間の使用した道具類に、使用者の魂が宿るのかも知れない。多少気味の悪い話ではあるが、日本の化け猫は飼い主の怨霊が猫に乗り移ったものである。したがって、ここでは鬼を拡大解釈し、鬼の範疇に入れておこう。

妖術に使われた紙の人形、土の人形、木の人形は面白い側面を持っている。

先ず人形であるが、これは当然人格を有した人形でなければならない。人格を有するとは、魂のあると言い換えてもいいだろう。例えば雛人形である。紙でできた雛人形を、健康を祈りつつ川に流すという故習を今なお続けている地方もある。流す前に、本人の穢れ・汚点を紙形に乗り移らせる必要がある。牽強付会を覚悟で言えば本人の魂の一部を移動させる行為だと考えられる。

紙は作られた最初から魂と深いかわりがあったと考えられる。位牌は仏教の重要な象徴である。しかし本来は儒教の神主であったという説がある²¹。紙に物故した故人の名前を書いて、お祭りしたのである。儒教の木札は、魂の依りしろだった。紙に魂が宿るのは、神社の神主が使用する幣を見ても分かる。この幣も神の依りしろであった。さらに安倍晴明ブームで有名になった式（または式紙）である。一定の形に折った或いは切った紙が、魂を吹き込まれてお使いをするのである。

紙の持つ霊性についてさらに触れたいところだが手に負える内容ではない。ただ、神社などで使用される紙の特性については注目したい。日本の折り紙であるが、たんなる動物や植物を模る遊びとは思えない。これは紙の持つ霊性にかこつけ、動物の捕獲、植物の繁茂を祈る儀礼とかかわりがあるのではないだろうか。神社・寺院などで配られる護符やお守りも本来は紙製のお札であった可能性もある。中国の切り紙もそのような意味合いから見直す必要があろう。紙の人形は終えて、土の人形にうつろう。

土は古代の土偶などが連想される。安産を祈って土偶に魂を宿したのである。各地に残る泥人形などは、古代の魂移動が忘却され、たんなる遊びの気持ち程度になっているように感じられてならない。中国では各地の泥人形が復活し、今なお人気であるという。以前存在した筈の大寺院或いは有名廟の近くには必ず泥人形の生産地がある。泥人形は、個人個人の魂を宿す大切な存在であったと思われる。紙と同じ霊性が存在したのではないだろうか。

中国の洒落ことばに「泥菩薩过江,自身难保」という言い方がある。意味は泥でできた菩薩が川を渡る、その心は、自分自身も保ちがたい。人を救うどころか、自分自身も救えない菩薩を笑い飛ばすジョークである。ここでは土製の菩薩が、動くことに注目したい。或いは靈験あらたかな菩薩が人を救うため、移動することに注目したい。ここでは勿論泥でできた菩薩は魂を持っている。紙と同じように土の持つ靈性の問題である。

木はことさら説明する必要もないかも知れない。樹木は、神の依りしろであった。青森県の山内丸山遺跡にある巨木、長野県諏訪神社の御柱神事など枚挙に暇がない。伊勢神宮の遷宮そのものも御柱の交替である。さらに樹木自身が神になる場合もあった。樹齢千年に達する縄文杉はいうまでもなく日本各地の樹齢数百年の神木は信仰の対象である。樹木に関しては世界樹という思想もあり、宇宙の中心でもあった。

日本の古代遺跡から出土する遺物の中で意外と多いのは木製の人形である。名前を記して呪文をかけ、井戸の中や土の中に埋めたようである。木製の人形の大きさはさまざまであるが、古代人の呪物である。神の依りしろ或いは神そのものとして、樹木は紙や土と同じ靈性を有するものとして取り扱われてきたようだ。この程度で「妖術」で使われた人形（紙・土・木）の説明は終えよう。

最後に犬の血に触れておこう。妖術を破るものとして、犬の血が使われている。ここでは犬に注目したい。犬の甲骨文字は、豚とよく似ているが、ともに古代人の飼いならした動物であった。狩猟には欠かせない味方であり、人間に協力して捕獲すべき動物と果敢に戦った。また異物が現れるときは、いち早く人間に知らせた、ある意味での警報機でもあった²²。

古代から犬は、邪気を察知し異物と戦う動物、として考えられていたようである。鬼が苦手とする動物もしたがって犬であった。とりわけ人間に災いをもたらすもののけ・ばけものの敵であった。占い師の透明術を破るものが、

鬼の苦手な犬の血であったことも多少理解できるかも知れない。「妖術」には、妖怪と果敢に戦う公が前面に描かれているが、鬼を中心としたお話ではない。以上で『鬼を恐れない物語』の内容を説明し、多少の解釈を加えてきた。次にこの運動の反響を見てみよう。

4．反響

中国青年報のコーナーに「鬼を恐れない精神を発揮しよう」というスローガンを掲げて読者の投稿を掲載している。タイトルは「重要なのは迷信を打破すること」「鬼を怖がるから鬼が出る」「鬼と勇敢に戦う」などと勇ましい。しかし、その内容は困難にひるまず仕事を貫徹するとかキャンペーンの繰り返しとか、題意に沿った内容ではない。運動を始めた関係者は、冷水を浴びせられた感じかも知れない。「鬼を恐れない」運動の失敗が確認できるような状態であった。

民俗的な意味から興味深い投稿もあったので紹介しよう。外交部陳直言の「最も鋭い桃の刀」である。「子供時代小父さんの幽霊話が怖くて仕方がなかった。村人の話では、村南の桃の木は鬼にとって『桃の刀』だと聞き、桃の枝をお守りにした。しかし、『鬼を恐れない物語』を読んで、毛沢東思想は最も鋭い『桃の刀』だと分かった。」要約すると以上ようになる。

外交部の役人らしい上手なまとめ方である。最後の言葉などは、キャンペーン関係者は感泣したかも知れない。或いはサクラである可能性を否定できない。ところで、「鬼が恐れるのは桃の木である」と言う話は興味深い。桃の木・桃の実とは伝統的に鬼を追い払う武器であった。おそらく鬼が物語に登場するのと同じ頃から桃は鬼退治の武器であったと思われる。物語に登場する鬼は、先に紹介した「宋定伯鬼を捉える」が早い時代であろう。鬼は勿論その時代以前から存在したと考えられる。しかし、鬼としての体裁を備えるのは、仏教が中国に紹介され異域の死生観が中国人に理解された後ではないかと思われる。

仏教の導入が中国の鬼を実体化させる機縁になったという推測を述べた

が、やがて日本に紹介された鬼も日本の変容を遂げたと思われる。中国の鬼は人の死霊なのだが、日本の鬼は、鎌倉仏教（日本の仏教）の隆盛と草紙類の普及によって、人の死霊から離れて仏教の牛頭馬頭（地獄の獄卒）に近づいたと思われる。いわゆるオニになるのは14世紀以降である。興味のある問題ではあるが、ここではこれ以上扱わない。

鬼と桃とはワンセットとして理解されたのではないかと思われる。その証明は今後の仕事として、桃の意味を諸橋大漢和辞典から探ってみよう。アイウエオ順に例を挙げてみることにする。

桃 印：漢代夏至の日に門戸に施して悪鬼を止めたもの。桃木を用い、面に文字を書く。

桃梗（人）：桃の木で造った人形。悪鬼を祓うに用いる。

桃弓（弧）：桃の木で作り、災厄を除去する弓。

桃（花）酒：桃花を漬した酒。之を飲めば病を除き、顔色を好くするという。

桃杖：桃の木で作った戟の柄。

桃板：桃の木で作った、吉祥を祈る札。古、元旦に之を門に懸けた。

桃符：桃の木で作った板二枚に（略）二神の像を描き、門傍に張って悪鬼を除く札。

桃茢：桃の木とあしの穂の簾。古、不祥を祓うに用いた。

桃が如何に鬼にかかわっているかお分かりいただけたと思う。吸血鬼ドラキュラを祓うのがニンニクならば、鬼を祓うものは桃・桃の実である。「桃の刀」は出てこないが、桃で作ることに意味があったのである。仙人の杖が、桃の木でなければ、鬼を祓う霊力はなさそうである。「妖術」では木偶の妖怪が弓矢を用いたが、鬼を倒す武器は桃の木でできた弓矢である。ドラキュラの心臓に杭を打ち込むことは、鬼を桃製の矢で射抜くことと同じであった。破魔矢・破魔弓は、本来桃の木で作られていたと思われる。

キャンペーンの最後に「『鬼神』説の由来」と題した郵式の文章がある。教条主義のお手本のような書き方である。「宗教が生じた説明にあるように、鬼神は原始時代自分自身や社会に対して、自然界の最も愚昧で原始的な想像の中から生まれたものである。」「各地に廟堂を建て、菩薩を作り、迷信の物語を編み、鬼神の書籍を出版し、鬼神を借りて反動統治者に対する人民の闘争意識を脅迫し麻痺させ、人民の階級矛盾の恨みをそらす働きをしている。」宗教はアヘン式の解釈である。宗教受難の現在、「愚昧で原始的」の解釈に賛成する向きもあるかもしれない。しかし人間の歴史をあまり単純に考えてもよろしくないようだ。人類共通の遺産である文化財ひとつ考えてみても、宗教の枠をはずすとどれほどのものが残るのかきわめて疑問である。日本文化から仏教的色彩を取り除くと何が残るのか、という疑問と同じであろう。

以上で『鬼を恐れない物語』の内容を概観し、反響を見てきた。多少鬼の性質にこだわりすぎたかも知れない。ところで、この運動は迷信を取り除くことを目的に始められたのだろうか。

5．運動の背景

大躍進は1958年から始まり、3年間続いた。中国未曾有の大災害もこの時期に重なる。大災害とは、大躍進の失敗による人災を意味している。中国の第一次五ヵ年計画は一年繰り上げて成功裏に終わった。続く第二次五ヵ年計画の夢は膨らみ、社会主義の有利性を発揮しつつ生産増強運動を強力に進め、「イギリスに追いつけ追い越せ」がスローガンになった。

中国を後進国から先進国にするため、朝鮮戦争時以上の挙国一致の体制が求められた。共産党は生産増強運動のため、無理を重ねて社会主義化を急いだのである。農村では集団化を急ぎ、初級合作社から高級合作社さらに人民公社へと常軌を逸して押し進められた。この運動に反対するもの、疑問を持つものは容赦なく犯罪者の列に加えられた。人民公社を社会主義のシンボルとみなし、社会主義の有利さを発揮できると確信していた毛沢東の思惑が最優先されたのである。

中国が抱えていた諸矛盾は、毛沢東が唱えた「百花斉放、百家争鳴」に呼応して表面化したように思われる。しかし毛沢東は批判の声に激怒し、反右派闘争を展開したことは、詳細に紹介した²³。共産党に批判的な知識人55万人が、市民権を剥奪され、労働改造所や刑務所に送られた。そのポストに共産党の幹部をすえて、体制の一新を図った。とりわけ学术界・新聞界の変化は激しく、共産党に迎合する雰囲気有助長させた²⁴。大躍進が始まると共産党の提灯記事から誇大記事へと報道の真実は消えてしまった。

「イギリスに追いつき、追い越す」というスローガンを目に見える形で提起したのが、58年の製鋼運動であった。鋼鉄でイギリスを追い越すため、全民製鋼運動が国民を疲弊させ、中国全土における膨大な浪費を招いたことは周知の事実である。農民も農作業を放棄して、動員されて製鋼運動や水利・灌漑事業に没頭させられた。人民公社化により農村における共産党の行政命令が貫徹するようになったのである。こちらの運動からあちらの運動へと農民は酷使され、生きるための穀物作りが忘れられたのである。

その結果は60年前後の大災害となって中国の大地を吹き荒れた。59年の廬山会議²⁵では人民公社の政策見直しが考慮される筈であったが、毛沢東の反撃で彭徳懷などが右傾の犯罪者に祭り上げられただけで終わった。その後餓死者は増え続け、60年前後の中国全土の餓死者は2000万人から4000万人と見積もられている。現在人口曲線に見られる60年前後の異常さは、目に見える形で当時の中国の現状を伝える語り部であろう。

以下に『人禍』から災害の現場を引用する²⁶。「榆の木や楊樹の皮はすべて剥ぎとられ、黄蓮よりもっと苦味がひどい柳の木の子皮さえも剥いて食べつくし、ふとんの中の綿までも取り出して食べた。死者がでると、餓死寸前の人びとがその死体を切り刻み、煮て食べてしまった。よその土地から村に逃げてきた人を殺して食べた者さえいた。さらには、まだ生きている自分の子どもまで殺して食べた者もいた。」²⁷

「路上といわず、田畑といわず、あたり一面には埋葬されないままの死体や白骨が転がっていた。村に足を踏み入れると、目もあてられない惨状であった。自分の家にかけてみると、すでに三人が息絶えていた。²⁸」「あるとき県城から家に戻る途中、道ばたにたくさんの死体が転がっているのを見た。生きのびるために村を捨てた多くの人びとが、路上で野垂れ死にしていたのだ。いたるところで塙や壁がくずれ、家族全員死に絶えていた家もあった。」²⁹

今から50年ほど前の事件なので、飢餓を体験し、生き地獄を見た生存者も多数いることだろう。餓死者の人数は、現在に至るも概数でしかない。しかし、当時の農村が陥った生き地獄は夢ではなく、まさに上述のような有様であったろうと思われる。王朝の交代時には、戦乱の明け暮れで、多数の農民が悲惨な状態に陥ったことは想像できないでもない。しかし、時代は共産党が政権を握る平和時の出来事である。

数千万の農民が餓死し新鬼となった。上述したように不幸な死に方をした鬼や恨みを持って死んだ鬼は、人に祟るのである。生き残った農民は、まさに鬼の世界と対峙していたのである。鬼になった家族を抱え、自分自身も鬼になりそうにして生きていたのである。戦争状態でもない世界で沈黙したまま死んでいく農民の悲惨さは想像を絶する。『人禍』に紹介された解放軍の兵士は、餓死者がでた農民の家族は兵士になれなかったと述べている。家族の怨霊を共有した農民すら忌避した現実は記憶しておこう。

このような時代背景の下で、「鬼を恐れない」運動は提起されたのである。古典を教材にして、鬼を恐れず、鬼を捉まえて、鬼に打撃を与えることが求められたのである。鬼は迷信以外の何ものでもなく、恐怖心理が生み出した影でしかないと強調しているのである。異常な状態下で提起された政治キャンペーンであった。人民公社化を進める過程で生じた失政には触れず、多数の餓死者が生まれた現状は無視して、鬼（死者）を恐らない運動を進める

感覚は異常としか表現できない。

と同時に革命の前進を妨害する妖鬼残余にも言及している。つまり革命を妨害する者を鬼の類だと認めているのである。数千万に上る餓死者を前にして、新鬼に哀悼の気持ちを懐くどころか、「鬼を恐れない」運動を展開して新鬼を足蹴にする政治とは一体何だろう。執拗に人民公社を信奉する毛沢東の姿は、神懸りのシャーマンの姿を彷彿させる。

おわりに

「鬼を恐れない」運動は、迷信を打破するために意図されたものではない。中国未曾有の大災害を招いた政治上の誤りを糊塗し、数千万にのぼる餓死者の恨みを恐れず、人民公社化をさらに進め、妨害する者を妖鬼残余とみなして排除しようとする政治的キャンペーンであった。『鬼を恐れない物語』の本当の読者は、農村で飢餓に苦しむ農民ではなく、労働改造所に送られた知識人でもない。大躍進で農民を酷使し、農民を餓死に導いた共産党官僚がその対象であったように思われる。毛沢東はこれら共産党官僚に、「鬼を恐れず、引き続いて人民公社化に努めよ！」と叱咤激励しているのである。毛沢東の意図に従わない共産党官僚や知識人は、文化大革命で牛鬼蛇神と呼ばれて打倒されたことは周知の事実である。「鬼を恐れない」運動は、このように考えないと理解できない運動であった。

注釈

1 何其芳(1912-1977)

四川省の出身である。北京大学で哲学を学び、早くから詩集を出している。抗日戦争中延安に行き、魯迅芸術学院の文学系主任を勤め、知識人の変革にかかわる詩集を出して有名になる。毛沢東文芸理論の発展に努め、解放後は文学研究所の所長になる。

2 『鬼を恐れない物語』

1961年の出版。鬼を恐れない内容の30数編の作品を掲載している。

3 文革初期に描かれた百鬼夜行図に、劉少奇・王光美・鄧小平などが打倒すべき実権派として、鬼神に戯画化され表現された。『鬼を恐れない物語』に登場し打倒すべき鬼と同じ姿で表現されたことに、毛沢東や文革派の怨念を感じる。

4 毛沢東選集第4巻、人民出版社1960年版、p1267

5 「反右派闘争後の大学教育」、同志社大学外国文学研究第69号、p184・185

6 世阿弥の作品

世阿弥の作品は、鬼を主題にしたものが多い。死んで怨霊となった人物の救済・成仏が主題で、鬼本来の姿をとどめているように思われる。

7 毛沢東選集第4巻、人民出版社1960年版、p1193

8 毛沢東選集第4巻、人民出版社1960年版、p1190

9 『搜神記』

晋の乾宝の選になる志怪小説集。

10 『牡丹亭還魂記』

明代の戯曲名。作者は湯顯祖である。杜麗娘と柳春卿の恋愛物語であるが、杜麗娘の魂と魄が分離するところに特徴がある。牡丹亭に魂が還って来るという内容の戯曲である。

11 神位とは「神霊が宿るところ。かたしろ。位牌。」(大漢和語林)注21の神主と同じ。

12 皇帝は、七廟一壇一セン(土偏に単の字)、諸侯は五廟一壇一セン、大夫は三廟二壇と規定されている。センは掃き清められた祭場、壇は土盛りをした祭場、廟は建物のある祭場である。

13 『子不語』

清の袁枚の選になる怪奇小説集。「我、奇怪の書を纂し、号して子不語と称す。」と自ら名づけた。論語の「子は怪力乱神を語らず」から命名したものである。

14 原文は「蓬首」で、現代語訳は「披头散发」である。いずれも髪の手入れのされていない状態である。冠をかむるための整髪は正常な状態、断髪或いは乱れ髪は異常な状態を表現する言葉として多用されている。断髪文身は中国文化と違う異域の人間を意味する言葉でもある。

15 映画の原題は『我的父亲・母亲』(日本での名前が『初恋の来た道』である)で、監督は張芸謀が勤めた。原作は、鮑十の『我的父亲母亲』であり、原作に沿って映画は製作されている。『あの子を探して』『至福のとき』とあわせて張芸謀の「幸せ三部作」と称される。

16 照壁

大邸宅或いは大寺院の外側にある目隠し壁。邸内にあるものを影壁として区別する場合もある。ともに妖怪や鬼神が侵入できないよう考えられた目隠し壁である。邪気を封じる動植物のレリーフが彫られた立派な壁も存在する。

17 殿試

科挙の試験は隋の時代から始まり、官僚の採用試験として重要な役割を果たしてきた。宋代以降、最終試験は皇帝自ら執行する場合が多く、このような最終段階の試験を殿試と称した。この物語では、于公は北京で最終試験に挑戦する受験生という設定である。

18 牛の吠える声

怪奇小説の中では、鬼の出す声は、牛の吠える声に擬えるケースが多い。

19 魚版

魚のかたちで中をうつろにした木製の仏具。禅寺などで吊り下げて時刻の合図などに敲击鳴らすもの。

20 聊齋志異

清代の蒲松齡の怪奇小説集。民間に流布した神仙狐鬼から妖怪変化まで幅広く収集された物語からなる。400編以上の作品が掲載されている。

21 神主

儒家で死者の官位・姓名を書いて、おたまやに安置するもの。位牌。木主。(大漢和語林)『沈黙の宗教 儒教』(加地伸行、ちくま書房) p 39に詳細な説明がある。

22 警報機

鬼が苦手とする動物に犬のほかサルや鳥がいる。サルは邪気を祓う目出度い動物として桃と一緒に描かれることが多い。鳥はさまざまな鳥が登場するが本来はニワトリであったように思われる。魑魅魍魎の活躍する夜が終わり、暁の知らせをするのがニワトリだからである。

23 「大学改革と反右派闘争」、同志社大学外国文学研究、第65, 66, 67号参照

24 「左葉事件」、同志社大学外国文学研究、第76, 77号参照

1961年5月に劉少奇は以下のように人民日報を非難している。「《人民日報》はいいことは報道し、まずいことは報道しない、都合のいいことのみ報道し、欠点や誤りは報道しない。多くの高い指標を宣伝し、衛星を打ち上げ(おおぼらを吹き)わが党を国際上受身の立場に立たせ、実際の仕事にも多大の悪影響を与えた。」(『中国共産党執政四十年』、中共党史出版社、p 199)

25 廬山会議

1959年夏廬山で開催された会議である。この会議は、人民公社の冒進を改める予定で開催されたが、彭徳懷の意見書から雰囲気が変わり、毛沢東はこの意見書を右傾の典型として彭徳懷グループを、改革を妨げる右傾集団として断罪した。これを契機にさらに極左政策が続き未曾有の人災を招くこととなった。

26 『人禍』、学陽書房、丁抒、森幹夫訳。1991年出版。

27 『人禍』 p 232

28 『人禍』 p 233

“不怕鬼”运动

1961年2月5日的人民日报记载了“不怕鬼的故事”序言，同时介绍了3篇作品。中国青年报也记载了序言而且选择了10篇作品介绍给读者。我认为这样，这是以“不怕鬼的故事”这样的名字为开始的政治运动。因此，把政治运动的目的和动向进行了研究来汇报一下。开始介绍了何其芳的序言，他们编辑“不怕鬼的故事”这本书来宣传毛泽东的论点，试图让读者明白，世界上妖魔多得很，要消灭它们需要一定时间，国内的困难还很大，中国型的妖魔残余还在作怪，社会主义伟大建设的道路上还有许多障碍要克服。何其芳的序言是想以此来恫吓中国型的妖魔残余。那么，中国型的妖魔残余究竟是谁呢？这样的妖魔残余真的存在吗？

先从报纸上介绍的3篇作品来分析鬼的特征。我们读了“宋定伯捉鬼”就明白，鬼是人死去后的灵魂，灵魂活动的时间是夜里，而且它没有重量。“陈鹏年吹气退缢鬼”告诉我们，人死去的灵魂有时候变为妖魔来作祟别人，吊死鬼要找它的替身。“妖术”和鬼是没有直接的关系的，但是让我们抱鬼的定义扩大一下来考虑把。妖术操作的人形有着灵魂，那么人形可以看作和鬼一样的东西。“妖术”提起的问题很有意思，也很深奥。灵魂和纸张・土块・木头的关系对我来讲是深不可测的。这3篇描写的鬼和我们日本人想像的鬼有很大的差别，为什么有这样的差别呢，其原因之一是接受佛教的差别。

最后我想介绍的是时代背景。六十年代前后，大跃进失败了，很多农民饿死了。正确的数目至今仍不清楚。据估计，那个时期死去的人数达千万之多。当然当时也发生了自然灾害，但是最大的原因还是毛泽东政治上的失败。这一点是现在的共产党领导人也不得不承认的。当时农村里很多农民吃草根树皮，最后甚至吃泥，大批大批死去了。这样至少有1500万的新鬼诞生了，其

中含恨抱怨而死去的妖鬼数不胜数。农村成了鬼怪徘徊的地方，这类谣言使农民疑神疑鬼，身心不安的。

这就是“不怕鬼的故事”出版的理由。毛泽东用这样的小册子来激励共产党员，让人们不怕鬼，继续进行革命运动。毛泽东的这个意图没能实现，因为大多数中国人内心可怜这些死去的新鬼。然而“不怕鬼”的运动失败了，可是毛泽东他们又策划了用文化大革命来打倒阻碍革命的妖魔残余。

“Don't Fear Ghosts.” Campaign

Matasuke NAWA

Key words: Ghosts, Spirits, Idolization